
シンポジウム 6

維新企画 6 : 転移性前立腺癌の新しい薬物療法・放射線療法

座 長 賀 本 敏 行 (宮崎大学医学部 発達泌尿生殖医学講座 泌尿器科学分野)
杉 元 幹 史 (香川大学医学部 泌尿器・副腎・腎移植外科)

司会のことば

尿路上皮癌・腎癌と同様に、転移性前立腺癌の診断・治療もまさに日進月歩の勢いで進化しています。新規薬剤の相次ぐ登場やコンビネーション療法の導入、最新画像診断とそれに基づく放射線治療、さらには遺伝子検査のルチン化やゲノム医療の普及により、診療体系は一層複雑化しています。こうした潮流をすべてキャッチアップすることは容易ではありません。

そこで本シンポジウムでは、次世代を担う5名の先生方に、最近の転移性前立腺癌診療の重要トピックスについて、独自の視点を交えながら分かりやすくご解説いただきました。

まず宮崎大学の澤田先生には、転移性前立腺癌に対する局所療法の位置づけについてお話しいただきました。これまでのエビデンスの整理に加え、ダブルット療法・トリプレット療法の時代においても局所治療の概念が適用可能か、そして本当に患者利益につながるのかという問いに対し、明確な考察を示していただきました。

愛媛大学の三浦先生には、近年強化されつつある治療戦略の全体像と今後の方向性についてご言及いただきました。まもなく登場が期待される新規作用機序を持つ治療薬の最新動向をご紹介いただくとともに、個別化医療

時代における医師の役割の重要性について再認識させていただきました。

香川大学の加藤先生からは、新たに私たちが手にした武器である PARP 阻害薬 (PARPi) について、その現状、検査の方法とタイミング、課題点、さらには今後の役割拡大の可能性に至るまで幅広いご解説を頂戴しました。PARPi と ARSI の併用療法の有用性や、現在進行中の新規 PARPi を用いた臨床試験についてもご紹介いただきました。

琉球大学の芦刈先生には、現在最も注目されている PSMA セラノスティクスについて詳細にご説明いただきました。本邦で導入が決まったばかりの本治療が、どのような臨床試験の結果を基盤として承認されたのか、そして今後、どのように安全かつ効率的に導入・運用すべきかについて、多くの示唆を頂きました。

最後に、久留米大学の名切先生には、局所療法としての小線源療法についてお話しいただきました。先生の職人としてのこだわりと確かな技術、そして驚くほど良好な治療成績について熱意をもって語っていただきました。

複雑化の一途をたどる前立腺癌診療において、本シンポジウムが、私たちが直面する課題への解決の糸口となりましたら幸いです。